



静脩

1988年7月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 25, No. 1

学術情報システム整備のこれまでとこれから

井 上 如

1) 学術情報センターは、周知のように、わが国における学術情報システムの整備を推進するためのシカケとして3年前に設立された。答申（昭和55年の学術審議会の答申『今後における学術情報システムの在り方について』のこと。以下単に答申と呼ぶ）に言う学術情報システムを構成する他の機関——大学図書館、大型計算機センター、国立の大学共同利用機関等——とはそこが違う。だからといって、学術情報センターの側から見れば（他の機関と違って）学術情報システムの全体像が見えるというわけではない。事実はむしろ逆であろう。それをもし見えているように思い込む、あるいは見えている範囲が学術情報システムの実現状況であるなどと思い込むことがあれば、それはこの崇高な目的に酔った結果の自己肥大に伴う幻想である筈で、従って仮りそめにもそうした天動説めいた思い込みに陥ることがあってはならない。学術情報は、まとめられた知識とは異なり、研究者一人一人の頭の中に、断片的に、従って分散して存在する。この事からひとまず離れて、学術情報システムを考えると、余程用心しなくてはならない。

2) 編集者の依頼に甘えて大仰な題を付けてしまったけれど、以下に述べるのは、今までの学術情報センターの事業が、答申の内容の実現、つまり学術情報システムの構築に対して、どうかかわってきたか、次の課題は何かということについての一つのスケッチである。それも、筆者に見える対象範囲からの素描に過ぎないことを繰り返しお断りしたい。併せてこの機会に、研究者を始め、大学図書館、出版者、学会、情報処理センターなど各々の立場から、学術情報システムがどう見えているか（学術情報システム論ではなく）について、種々の観察結果が提出され、お互いに各々のパースペクティブを交換する機会がもっと増えるようにという希望を述べさせて頂きたい。

3) 答申を読むと、その基本的な考え方というのは、答申本文の後の方、7ページから8ページにかけて出てくる。曰く：“学術研究活動の諸過程で必要とされる各種の情報を的確かつ効率的に利用者に提供するシステム”で、第一に必要な諸機能の有機的な連結、第二に資源共有、第三に研究者にとっての最適システムの三つをその要件として指摘している。提出後8年経た今日、ほとん

ど無傷のまま引用できる答申本文の数少ない箇所として、この基本的考え方の部分があるのは、この答申の値打ち、今でもそこに立ち帰って考える値打ちがあるということを示唆していると思う。おそらく答申の最大眼目は、この“学術研究の諸過程で必要とされる情報”という一点に集約されると見るのが、現時点での答申の正しい読みかたではないか。但し、答申そのものはこの“諸過程”については、指摘するだけで特段の分析をしていない。

分析のためのアプローチは三つあると思う。一つは研究者の日常行動に即して捉えて、研究者が情報を集め使う行動と、情報を生産し流通せしめる行動とに分ける方法、二つ目は研究者がその研究の諸過程でかわる情報を、資料化された範囲に限定し、0次情報から3次情報までの展開として整理する方法、三つ目は、情報処理機器としてのコンピュータと、その処理結果を流通させるための通信ネットワークとをインフラストラクチャとして提供しておいて、その上での諸過程の実現状況を見るという方法である。これらは、波打ち際に寄せる波が幾重にも重なるように重なっており、沖にあるほど深く、大きく、しかし見えにくい。ここでは、第一の方法（この二分法が他の二つの多次的な展開に比べ粗雑であることは認めるが）の立場で整理したい。

4) さて、昭和55年に立ち戻って、答申の中心的主題は、三つの問題点を挙げ、その意義、現状、今後の解決課題を示したことである。すなわち、第一は1次資料の収集・提供の充実、第二は情報検索システムの確立、第三はデータベース形成の促進である。これらの問題は三つ一緒に解決するというようなものではないし、順番に一つ一つ解決していくようなものでもない（この事は、本稿全体の底流にあるが、敢えて一つ一つ取り上げる）。答申を受けて設置された学術情報システム設置調査と、開発調査の委員会では、これらの問題解決の可能性の検討と、シナリオ作りをした。そのシナリオを踏まえて、学術情報センターは（前身の文献情報センター時代も含めて）、結局第

二の情報検索システムの確立から着手した。中でも答申の中で既に優先順位の高かった目録所在情報サービスを、大学図書館向けに提供することから始めた。現在、62の大学がこれを利用して下さっている。昭和62年4月からは二次情報検索サービスの提供を開始した。63年3月末で885名の方がこれを利用して下さっている。ゆくゆくはこれら二つのサービスを統合して、主題検索から原文献の所在同定と入手まで一貫したシステムにすることを目指しているが、これもおおむね答申にそう書かれていることを忠実に実現しようとしているのだといってよい。

5) 学術情報センターの側からは、目録所在情報サービスの利用館が増え、所在情報の蓄積が増え、総合目録が充実するというところまでは見える。国際的にみても、これが書誌ユティリティというものの一つの行き着く先らしい。しかし、だから大学図書館間における重複購入が減る（答申にはこれも学術情報システムの最終目標の一つとしている）とか、複写や貸出などの相互利用が増えとかの事は不明である（ILLシステムはまだ実現していない）。総合目録の充実と、これらの事との間に直接の連続性は見いだせない。つまり、答申の第一の問題点の解決と、第二の問題点である目録所在情報サービスの解決との間には距離があるらしい。当初のシナリオのこの部分は、やや観念的——理想主義的に過ぎたのだろうか。おそらく、1次資料の収集における文部省の学術情報課を中心とする図書館蔵書の立体化（外国雑誌センター、文献資料センター、データ資料センターの整備）の努力に依存し過ぎて、問題の所在を収集にのみ限定した、利用開発が立ち遅れたというのが実状であろう。ここに学術情報システムの直面する一つのフロンティア、つまり第一の課題がある。

6) さて、学術情報センターでは、1年間の調査研究段階を経て、今までとは全く異なる方向に向かって、昭和63年度から一つの事業を展開し始めた。それがデータベース形成事業である。デー

データベースの形成なら、目録所在情報サービスの上に構築する総合目録だってそうじゃないか、あるいは、それ以前から形成と利用の長い歴史を持つ学術雑誌総合目録だってあるじゃないかという反論が、特に大学図書館の側から出てきそうである。しかし学総目や目録所在情報事業の特徴は、大学図書館を中心として、学術情報センターというシカケを利用しながら形成してきたものだという事である。これらのデータベースは、大学図書館と学術情報センターの合作であって、研究者はそこに関与していない。ところが、学術情報センターの次の事業としてのデータベース作りは、例の“学術研究の諸過程で必要とされる情報”に即した、研究者との共同によるデータベース作りである。今までは研究者の情報活動の諸過程の中の、収集という点で主として仕事をしてきた。研究者が大学図書館を利用し、そこで資料収集を行うその過程に、目録所在情報を提供するという事を介して、参加してきた。今後は、研究者の情報収集ではない別の面、研究成果としての論文の執筆と発表という面で何か役に立てないかという試みである。今までとは全く異なる方向と申した所以である。

7) ところが、ここに一つ問題がある。というのは、研究者の情報収集行動というのは個人的な行動である。図書館を利用するも、あるいは図書館の代行検索を利用するも同じ事で、これらは原則として全て個人的な行動である。大学図書館が、この基本的に個人の動機に基づく行動を伝統的に旨く束ねてきた。ところが、学会発表論文の作成とデータベース作りとを旨く連動させるなどという仕事になると、これまた基本的に個人の動機に

基づく行動でありながら、それだけでは片付かない面がある。個人の情報消費行動を図書館が旨く束ねてきたように、個人の情報生産行動を旨く束ねるシカケが必要だ。ここに学会あるいは学会連合という組織が登場して来る根拠がある。これは実は、答申の段階では全くといっていいほど見えていなかったことである。ここにもう一つのフロンティア、つまり第二の課題がある。

8) 最後にまとめて述べる。

学術情報センターは、今まで大学図書館と組んで目録所在情報の蓄積と流通の促進に携わってきた。これは答申が解決を求めた三つの問題の内の第二のものであり、シナリオも出来ていた。学術情報センターは、次の仕事として、学会と組んでデータベース作りを始めた。これは答申が解決を求めた第三の問題であるが、シナリオはない。第一の問題には今のところ手が届いていない。

そこで、次の課題は二つある。一つは、大学図書館を中心にして答申に言う第一の問題の内の利用開発に取り組むためのシナリオを書くことである。これは大学図書館が中心になってやる仕事と思われる。二つ目は、データベース作り（答申第三の問題）を、研究者の研究成果物の生産・発表過程と並行させながら進めていくためのシナリオ作りである。これは、学会と、学術出版と、学術情報センターとが協力しながら行う仕事であろう。

答申の基本は、“学術研究活動の諸過程で必要となる各種の情報への対応”であった。研究者が情報を使う行動に大学図書館を介してまず対応し、ついで情報を作る行動に学会を介して対応しようとしているのが学術情報センターの現状である。

(学術情報センター教授)